

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、男優陣および女優陣―

## 第九節 反体制戯曲への監視と弾圧（第一年九月『瓦斯』）

反戦運動や反体制思想を取り締まる官憲の監視は、早くも築地小劇場の柿落しに向けられたが、その四カ月後産業社会を批判する戯曲『瓦斯』の大幅な削除が命じられた。作品の性格と弾圧の結果については、同劇場の顧客浅野時一郎の劇評が貴重である。

### 『瓦斯』に対する検閲・弾圧（浅野時一郎著『私の築地小劇場』）

秋のシーズンは九月二日に『瓦斯』の爆発で蓋を明けた。ゲオルグ・カイゼルの芝居の初登場である。・『瓦斯』第一部。この芝居では最初の幕で工場の瓦斯が爆発する。瓦斯製造の公式に誤りがなかったにもかかわらず、瓦斯が爆発したことがわかった時、工場主の取った態度は特異であった。彼は技師追放要求のストを蹴って、一步進めて工場を閉鎖し、緑の田園にかえてしまおうとするのである。瓦斯製造を続ければ再び爆発が起こるだけだと考えたのだ。しかし、その意向が伝わると、今まで技師排斥を叫んでいた労務者が態度を変える。煽動する技師と呼応して工場再建を叫び出すし、一方政府は兵器工場確保のために工場主を圧迫する。工場を占領され、投石で傷ついた工場主の、人間実現のむなしい夢を訴えるのが修景である。それに答えるものは、未亡人になった娘が、亡夫の遺児を産みましようという言葉です。

第一次大戦直後の作品らしい厭戦気分もあるが、機械文明を否定して、工場を緑野にかえそうというのは、原始的な人道主義のにおいもする。・・・観念的な、どっちかといえれば穏やかな芝居のはずであるが、それをいっそう穏やかにしてしまったのが検閲の力であった。

昔の芝居は始終検閲で脅かされていた。それは左翼でもエロでも同じである。時には不条理な神経質が、権力をかさに着て横行したものである。この芝居では第四幕が目の敵にされていた。瓦斯の爆発で肉親を失った労務者たちがこもごも立って、悲痛な訴えをする場である。せりふが削られて、なくなってしまう役もあった。伏見直江の初舞台がサイレントになったのはそのためである。山本も田村もしゃべることが短く、尻切れとんぼになっていた。

客席の最後列の一端を少し高くして、電灯と机を備えた臨監席というものが、どこの劇場にもあった。築地小劇場にも作られていて、そこには脚本を持った巡査が来ている。初日が明いてからでも、効果の上がりすぎる場があると、カットの追加を受けるのだった。もちろん上演台本は初日の十日前までに、警視庁検閲係の手に提出して、許可をもらわなければ上演できない。その許可がたいは初日直前に下がる。もちろんそのままの台本ではない。そこで、やれカットだ、やれ上演中止だと、劇場側はしばしば大混乱を生じるのであった。

ひどいカットをされても、劇場側は大金をかけて準備したものを放棄するわけにはゆかないので、ご無理ごもっともで命令に従うことになる。時には作者にも見物にも、相済まないものを涙をのんで上演することになった。それが戦後なくなったのである。

夏の間のご無沙汰が長かったので、私は初日を兼ねて見物した。カットはその時もわかったが、数日後に

もう一度行くと、前記の幕などがまた一段と短くなっているのであった。土方与志の回想では、その演出した百ぐらいの芝居の中で、検閲のカットを受けなかったのは十五ぐらいしかなかったそうである。客席において検閲の暴力ということを痛感させられたのは、この芝居が最初であった。①

大正十三年九月築地小劇場で上演された『瓦斯』については、検閲の痕跡を確認できる台本が保存される。六六年後に復刻された『築地小劇場上演検閲上演台本集』全十二巻に含まれるからである。台本『瓦斯第一部五幕』は全文細字で手書きされ、冒頭には「警視庁／大正十三年九月壹日／検閲済／支障ナシ（三木）」の査証が刻印される。

浅野時一郎の証言でも伝えられとおり、この脚本でとくに苛酷な監視を受けたのは第四幕であった。第四幕の前半を構成する頁数十六において、ト書きを含む総計二一九行のうち、実に一四七行が消去された。台本では削除を命ずる台詞等には太い斜線が引かれたが、その一端を復元する本稿では該当部分を空色により明示する。なお、原本には判読困難な細字がしばしば含まれる。②

① 浅野時一郎著『私の築地小劇場』七四―七六頁。

② ゲオルグ・カイゼル著・黒田礼二訳『瓦斯』（『築地小劇場上演検閲上演台本集』第二巻（夜の宿・瓦斯）』ゆまに書房、一九九〇年。一八九―一八九、二七一―二八六頁。

#### ゲオルグ・カイゼル作・黒田礼二訳『瓦斯』（『築地小劇場上演検閲上演台本集』）

第一年度第六回公演 九月二日より十一日まで

#### 第四幕

混凝土の会館、固くて煙っぽく天井が高い。円天井から塵埃のちらつく丸ランプの光がさして居る。中央は狭くて嶮しい鉄の演壇が立って居る。労働者の集会を現わす。中には多数の女も混ってる。―すべて沈黙。

小さい声から段々高くなって行く。誰だ！

一人の娘演壇のほうへ立って行く。

娘

（手を高く挙げ）私です。（沈黙）

娘

私は自分の兄のことを申し上げます！私には一人の兄がいたのかどうか、知らなかった位です。

一人の男が家から早朝に出て行って、夕方帰り、すぐ寝て仕舞う。さもなければ夕方家を出て、朝帰り、すぐ寝て了う。一方の手は大きくって、他方の手は小さかった。大きい方の手は汚なかった。何時でも動かししていた。あちこちと。昼でも夜でもそれは兄の体を喰って育ち、その全体の力を滋養分として生長した。その手だけが人間だったのです。どこに私が兄がいました？ 切ない時は私と一緒に遊んだ。両手を砂いじりなんかして遊んだあの兄は？ 彼は労働に身を投じたそうです。女労働は兄にただ一本の手だけを要求しました。横杆を押しては揚げ、揚げては押し―上から下へ、下から上へと正確に―時計の音の刻む様に動かし

て居ました！一寸の間も手を休めることが出来ぬ。拉杵を少しの間違いもなく几帳面に敲いて、女前に兄は○人の○になり、一生懸命に従事していました。ですから一度も失策をしなかった。一度も数の違いをしなかった。兄の手が頭に数へさせていたのです。頭はただ手の言うことだけを聴くようになって居たんだから！そんな悲惨な状態だけが兄に残って居たんです！いいやそれも残りなく打った。或日の正午に不意に電光が閃いた。あらゆる間隙や穴から焰の波が押し寄せてきた。女処は火爆発が起って、兄の手を喰ってしまった。兄は最後まで残したものを○してしまった。―それでも少なすぎると言いますか。雇主が兄を傭はないで、兄の手を傭ったためにです。兄は○○す○引もしたというんですか？彼は人の兄となることを広め、只全身を数に刻む手のなかへ握り締めたかったとお考えですか。彼は最後にたった一本捕らえたその手で、支払ったじゃありませんか？その支払ではまだすくな過ぎますか。エンジニアを出してしまふまで、私の兄は今私の声となつてこう叫ぶのです。誰も労働者へ○れるな。尠なくともエンジニアが工場からでるまでは。労働しちやいけない。―これが私の兄の声です！

娘（壇を降りる）それが私の兄自身です！（娘下って群衆のなかへ這入る。）（沈黙）

声（更に新しい波打つて来る）誰だ！

母（一人の母壇に上がる）私です！（沈黙）

母 一人の母の子は爆発で粉微塵となりました。子息って一体何です。焰が舐め尽したのは何です？私の子息だったとお考えですか？女人○を私は○らなかつたのです。或る日の暗い朝に彼を工場勤めさす為に、お葬いに出してからもう殆んど見たこともなかつた人間です。工場では只検査函をじつと二つの目で睨んで動かなかった。それは只の二つの目ででしょうか。それとも一人の子息でしょうか。私の子供は何処に

いる―私は一つの口にて可愛いく笑む、手足も活発でに振り動かされる小供を産んだ筈だったが！私の子供は―私の子供は私の首に嚙り付いて戯れてゐた。そして嬉し相に私に接吻して呉れて居た。あの私の小供ですか？私の小供ですか？私は母親ですからよく知つて居ます。陣痛の苦しみも、小供に先立たれた悲しみも、私は母親です。―が今は女々しく溜息はつかぬ。溢る叫び声は咽喉の中へ押し込み、外には出さぬ様にしてゐます。私は母です。母として腹を立てたり訴へたりはしない積りです。―が私がやるんじゃない―此の○の○は居る私の小供が訴えて居るのです。一度私の胎を出て幸せに生まれた小供が死んで又もや私の腹の中に戻つて来た。―母より生まれ、母に戻つた。私の子息は又もや私の身体の中に宿つて居る。それが私の血筈のなかで暴れる。私の舌を無理にも動かして思わず知らず大声で○○叫ばせる。―お母さん―お母さんはもう私の処に居ては呉れないんだ！お母さん！お母さんは私をひとりぼっちに放つて置いたんだ。―お母さん―お母さんはあの検査函を叩き壊して呉れ一寸の指ほどの長さの弱いものじゃないか。蠅の羽根の様な脆い物じゃないか。―何故其弱い検査函を自分で壊して呉れない？何故それを壊さない為め悲惨な犠牲となり○いては母親の悲しみとなる様になつたじゃないか？何故自分の○○を不具にした。―全身の力と眼を集めて只じつと睨め付けて居る為めかしら？何故そこへ火花が飛び込んで来て眼を突き戻したんだろ？何故か。小供は一切を残さなければならぬかしら―何ひとつ要求しないで？小供の一身の損害位じゃ足りないの？此処に一人の母親が居ます。―而して彼処には例のエンジニアが○ます。

（母どもは互いに押し会○○、合い身と寄せあわし）

女ども それは私の子息だ！

母 此のお母さん、此のお母さん、このお母さん―此のみんなのお母さんたち中に自分の子息が斯

う叫んでいる！我々を締め殺したくなけりや、工場へ近寄って下さるな！工場へ〇〇―彼処にはエンジニアが居る！

女 工場へ近寄るな！

母 (演壇を下り女どもの中に這入る) (沈黙)

声 (こは高く) 誰だ！

妻 (壇に上って) 私です。(沈黙)

妻 婚礼の日は一日続いた。其の日の午后はピアノを奏いた。お客さんたちは部屋の中で踊った。いつち日―朝から―正午と―それから夜にかけて。私の夫はその一日私の傍らに居ました。朝から正午と、それから夜にかけて。其一日が全一生でした。・・・工場は私の夫よりも重要なものでせうか？其の夫は僅か一日の結婚の日を楽しみ―翌日からもう終生死んで了ったあの男よりも大切でしょうか。労働者は動物見たいなものだから―ひとり死ぬりや別の動物を以て埋め合わせる―而して工場は前と同じ様に活動を続けて行かれるんですね。どしどしとるかへ引きかへして―仕事大は何時までも続けていくのですね？夫の為にもう校楨を握らせて下さるな―夫は為めてもう検査函を見続ける仕事をさしてくださるな―私の夫の為に発動〇の上に乗せて下さるな―エンジニアが皆さんを放逐するのです。―エンジニアが皆さんを放逐するのです！

妻ども (壇の周囲に襷が登る) 私の夫のために働くな！

娘ども 私の兄の為に働くな！

母ども 私の子息の為に働くな！

(妻演壇を下る、一人の労働者代りに壇に上る)

労働者 娘よ！此の俺が兄だ！誓って言ふ俺が兄弟だ。誓って言ふ俺が焼け死んだのだ。今では爆発の壊れ物の下敷きとなって地上に横はって居る。お前が楨杵を握れと言ふまでは〇たふひ―とは微〇とあったお前のためよ―それ此処にあの手がある―コトコトと〇る楨杵の〇で把手を掴むか〇めよこんなにべちゃんこで、またこんなに硬ばって来る！次の手で賃金を儲けて来たのだ。―その金は〇の凹みに集った―それを受取るが早いのか、手は急いで家族に帰る。然し手は賃金がいくらあるか数えて見たりなんかしない。其の儘抽斗の中へ投げ込んで置く。纏て箱は賃銀で一杯になる―然しそんな金は役に立たぬ―お前の兄さん全体を殺した―あの手だけで何を買えるかね？唯一の手と―其から箱にぎつしり詰めた賃銀ととが何だ？手には支払はれて居る―がお前の兄さんには支払はれて居ない。それが焼け死んだ―今俺と云う生きた人間はなり代ってここに立ってゐる―此処に俺があり貸しになっている賃銀の為に絶叫して居る―すなわちエンジニアを追っ払へーエンジニアを追っ払へ！

多数の労働者 (演壇の周囲に騒いで) 兄弟は俺だ！

①

ゲオルグ・カイゼル作『瓦斯』配役

第十回公演 大正十三年九月二日―十二日 毎夕七時

書記Ⅱ友田恭助      白い紳士Ⅱ汐見洋      技師Ⅱ千田是也      労働者Ⅱ竹内良作      富豪Ⅱ青山杉作  
富豪の娘Ⅱ吉野光枝      士官Ⅱ生方賢一郎      労働者Ⅱ小野宮吉・藤輪和正・浅野浩・横田儔  
娘Ⅱ伏見直江      母Ⅱ山本安英      妻Ⅱ田村秋子      政府代表Ⅱ汐見洋      大尉Ⅱ丸山定夫  
黒い紳士Ⅱ東屋三郎・汐見洋・竹内良作・丸山定夫・隅田竜郎  
演出Ⅱ土方与志      配光Ⅱ岩村和雄      効果Ⅱ和田精      装置・衣裳Ⅱ美術部      ①

なお『瓦斯』は大正十四年二月にも再演されるが、台詞のほとんどを削除された娘役の伏見直江と母役の山本安英が、この際には配役一覧から消された。

この月配布された機関誌『築地小劇場』には戯曲『瓦斯』の荒筋とカイゼルの略歴が解説された。主題は繊維部門における産業災害であり、大幅に削除されたのは、犠牲者の家族および同僚の悲痛な訴えである。なお、これの解説者、北村喜八自身の諷刺劇『猿から貰った柿の種』も、やがて三年後大幅な削除を命じられる。

#### 北村喜八「カイゼルの三部作（瓦斯第一部）」（『築地小劇場』第一巻第四号）

ゲオルグ・カイゼルの『珊瑚』『瓦斯第一部』『瓦斯第二部』は三部作をなすものである。彼は思想の豊富さ、能力の偉大さ、技巧の多様さに於て、表現派の戯曲家中でも一つの謎である。そして、或時は氷のや

#### ① 水品春樹著『新劇去来―築地小劇場史』一二六、一三二頁。

うに冷たい皮肉の眼を以て肉の喜劇をつくり、或る時はプラトン流の思想劇に走り、或時は心霊のフィルムを試みて主人公の魂の姿を暴露し、或時は社会の虚偽に対する挑戦状を草して戦を宣言する。・・・

『瓦斯第一部』に於ては大規模に瓦斯が製造される。瓦斯はあらゆる水力や動力に勝るものとして、あらゆる機械に、あらゆる工業に使用されている。・・・この瓦斯の工場が爆発した。技師の公式には些かの誤りも無かった。人智の及ぶ限りは尽されてゐた。しかも爆発したのである。

これは瓦斯製法そのものの中に爆発する要素があるからである。であるから瓦斯の製造を継続することは、第二、第三の爆発を予期しなければならない。これを感じたのは百万長者の息子唯一人である。

彼は瓦斯製造の無意義さを感じる。そして、多くの労働者が瓦斯製造の機械に必要な一本の手、一本の足、一つの眼になって、人間としての自己を忘却し放擲している恐ろしさを感じる。そのために彼は、この無意義さから脱れ、人間性へ帰るために、緑の森林と緑の牧場の大植民地を空想しその計画を夢めている。

然し、労働者達は工場を再建し、労働へ、機械への復帰を主張する。実業家の代表もこれを要求する。国家の代表もこれを命令する。機械は再び動いた。瓦斯は再び製造されるのである。

この曲では一人目醒めた百万長者の息子は、人間が機械から脱れ、人間としての意義と存在とを全くするために、緑の森林と緑の牧場の大植民地へ、大地へ帰る事を主張している。

#### ゲオルグ・カイゼル小伝

ゲオルグ・カイゼルは一八七八年十一月二五日、マアクブルクに呱呱の声を挙げた一田舎者である。父はフリードリッヒと云って商人であった。母はトミ・アントンと言った。カイゼルはマアクブルクの僧院で若い頃の教育を受けた後、商人となって三年間南米のベノス・アイレスで過した。西班牙・伊太利を通じて、

再びマアクブルクに帰って結婚し、その後ゼエハイムやワイマアルや、その他諸処に移り住んだ。何時頃から戯曲に筆を染めたか明らかでないが、諸所に移り住む間に多方面な傾向と様々な色彩の奇怪な戯曲をつくり上げた。①

カイゼル作『瓦斯』が辛苦して供された翌月、今度は戯曲『作者を探す六人の登場人物』が官憲の俎上に載せられる。「十月二五、二六、二七の三日間はピランデルロの『作者を探す六人の登場人物』を上演した。これは初め上演許可になったのを、奔走して非公開の形で行われたのである。」② この作品の構成と内容はかなり奇矯であるが、同月配布された冊子『築地小劇場』には、筋書きの核心が紹介された。

#### 蛇頭生「作者を探す六人の登場人物」(『築地小劇場』第一卷第六号)

それは家庭悲劇である。

一、教養ある父は、尋常なる女たる母と婚す。

二、二人の間に口数少く意地悪き子を挙ぐ。

- ① 北村喜八「カイゼルの三部作(珊瑚、瓦斯第一部、瓦斯第二部)」(『築地小劇場』第一卷第四号)三〇、三二―三三頁。

- ② 水品春樹著『新劇去来』三二、一二八頁。

三、母、夫の秘書役と通ず。

四、父これを知りて、母情人と共に家を棄つるに任す。子を手許にとどむ。

五、数年後母と情人は田舎に潜みて、父違いの娘、男児、幼児を挙ぐ。情人物故す。貧窮迫る。母三子と共にローマに出でて仕立屋となる。仕立屋の女主人卑しき渡世をなしおりて、父違いの娘をそそのかして淫をひしがしむ。

六、父、父違いの娘の漂客となる。

七、母この事実を知りて、大いに驚きてこれをさまたげんとす。

八、父は母および三子を自家に連れ来る。嫡子なる子は、三人の私生児を輕蔑す。

九、やがて六人は互いに不自然なる位置に置かれあるを知る。

十、この重苦しき空気にこもる家庭にて、家人の監視怠りしかば、幼児庭の池に陥ちて溺死す。

十一、父違いの娘、恐怖の余り家を去る。

十二、昔の如く父、母、子のみ家に残る。

①

会員限定三日間の上演ながら、寄せられた劇評からは、演出者・演技者の努力と観客の好感・支援が拝察できる。

- ① 蛇頭生「作者を探す六人の登場人物」(『築地小劇場』第一卷第六号、一九二四年十月。『二二―二四頁。』)

倉橋弥一「作者を探す六人の登場人物」(『築地小劇場』第一卷第七号。)

この芝居が風紀上いけないなら、日々の新聞紙は当然差しとめねばなるまい。併しこうして三日なりとも上演できるのは嬉しいことである。私は初日にみた。開幕前土方氏が練習不足のようにもうされたが、父になった横田が幻想と現実を一度間違えていったほかは、みな驚くべき出来であった。・・・

役者はこの頃だんだんうまくなっていく。横田、東屋の二氏の努力は感謝に値する。私は千田の息子をあげたい。立派な出来である。

のぶゆき 無題(同書)

何という悲痛な場面であろう。「うわあ、素敵素敵、こいつあ新しい、こいつあ素敵だ、おい幕だ、幕だ」――またしても我が監督者のフチこわしな声がする。そこで監督と主人公を我々の席にのこして本当の幕が下りてしまう。・・・

誰だってこんな妙な劇は見た事がないに決っている。外国の何処かで演出した際観客が皆承知せずに怒り出したというのは本当の事であろう。それ程この劇は舞台と観客の距離をなくしている。・・・

花柳氏の娘は又素晴らしい出来栄である。初めはもう少し平常の態度が違っ葉でもよいと思っただけれど、矢張自ら不可抗的な運命に力づけられている、絶望的な人生観にとらわれた人間としてあの様な表現法をとる法が完全に近いと思わせられた。・・・

自分は瓦斯と共にこの土方氏の今度の演出を好む。土方氏の演出は力と理解がこもっている。この日も友達と愉快な満足した気持で劇場を後にすることが出来ました。厚く御礼を申し上げます。①